

ベトナムの漢字筆談に関する研究

Nguyen Hoang Thien Nguyen Tranh Tranh Ouyang
阮 黄申・阮 俊強

(張三妮 訳)

一、漢字—文字を用いれば、多国家に通ず

(一) ベトナムの歴史文化における中国の漢字(文言文)

漢字がベトナムに伝えられてから、漢字はベトナムの政治、社会、文化の分野で重要なツールとなった。ベトナムでは漢字を使用して文章を著述し、歴史を記録した。一方、漢字の導入の後、ベトナムは自ら字喃(チュノム)を作り出し、多くの字喃典籍が発行されている。近代(一八五八—一九四五)では、字喃と国語字(のローマ字)が形成され、広く使用されるようになったが、漢字は依然として重んじられ利用されていた。一つの例として、中国にいる潘佩珠(Phan Bội Châu)がベトナム国内へ密かに連絡しなければならなかったときには、李瑞(ホーチミン Ho Chi Minh)胡志明が中国滞在時に使用した名前)に出す手紙は依然として漢字をもって書かれていた。

(二) ベトナム人の国際交流における漢字の役割
一九四五年以前は、ベトナム人は主に中国、朝鮮半島、日本などの国の人々と接触し交流していた。ここでは、漢字を使用して意思疎通が行われ、数多くの成果が得られた。潘佩珠は、ある出来事について回想している。

四月中旬に日露戦争が終戦して、日本の船だけが上海に行くことができた。日本へ留学するひとりの中国人—湖南省出身の趙光服—を頼んで、その人を我々のガイドとして、みんなで日本の船で横浜を目指した。横浜に着いたとたんに、問題が発生した。日本語は出来ず、中国語も分からないので、仕方なく、筆を用いて会話し、身振り手振りで意思疎通せざるを得ないのは骨のおれることであつた。¹⁾

ベトナム系カナダ人の永聘(エイ・シン)氏は、「潘氏は漢文(中国文言文)と字喃と二種類の文字の読み書きができたが、そういう「財産」を用いて、中国人と日本人がコミュニケーションをとる場合に、潘氏が採りうる唯一の方法は筆談であった」と指摘している。

従来、中国に派遣されたベトナム使節団は、少数の現地語ができる通事や通訳を除いて、使節団の構成員の大多数は、現地人と交流する時に漢字による筆談を用いた。『往津日記』においては、阮述は、ベトナムの使節団と清の政府代表団、または中国社会のその他さまざまな階層の人々と筆談で交流を行った状況を数多く記録している。さらに、中国において、ベトナム人は朝鮮人、日本人、場合によっては欧米人とも漢字をもって筆談していた。朝鮮王国の駐清使節である李晔光は、かつてベトナムの使節団の状況を次のように説明している。「馮克寛(フン・カク・コアン)使節団の二三人は全員髪を一つに束ねている。一人の中国語の分かる通訳者以外、ほかの団員は筆談で意思疎通を行っている」。

筆談は、日常のコミュニケーション手段として使用できるだけでなく、緊急の状況下でも、更に外国で発生した問題を解決することもできる。一例として、潘佩珠ら「東遊運動」の人々は外交費用や家賃にも事欠く、苦しい経済状況の中で、為すすべが無くなった潘佩珠は一通の手紙(漢文)を認めて、

阮泰拔(タエン・タイ・バット)に托して、面識のない浅羽佐喜太郎(一八六七〜一九一〇)に経済的援助を求めたという。その後、浅羽氏の死去を知った潘佩珠は浅羽氏の家族に対して、その墓前に碑を建てて記念としたいという思いを伝えた。明らかに、この当時の漢字は外国に滞在するベトナム人が、国際交流の中で知人に感謝の意を表するためのツールであった。

特に、漢文体の文書は、ベトナムが外国との関係における重要な問題について話し合うための手段でもある。当時、阮朝の歴代国王たちは、しばしば漢文体の文書を使って外国と接触し、相互の外交関係を強化し、自国の地位の安定化をはかった。すべての文書は、『安南国書』に収められている。別の例としては、阮鷹(タエン・チャイ)と王通(明代の武人)との往復通信は、柔軟な軍事外交の手法となっている。さらに、ベトナムに漂流した中国人、日本人、朝鮮人の一部も、漢字を頼りに交流を行ったのである。

同時に、外国政府も漢文体文書を用いてベトナムと意見を交換しており、例えば、日本はベトナムと貿易問題を議論するために漢文を使用した。「安南国執事」に宛てて上呈された文書の中で、角倉与一と角倉宗恂は次のように書いている。

……我が国の命により貿易使節として、我らは貴国と、両国間において従来正式に承認されてきた貿易関係につい

て、再度確認したい。特に、両国間の友好関係を促進するために、今年より貿易使節を交換し始めたことは、両国の末永い利益になるものではないか。⁵⁾

一六〇五年に角倉与一が藤原惺窩に依頼して「安南国頭牧」に宛てて送った手紙の中で、角倉は一昨年日本人の船員がベトナムで犯した罪に対して謝罪の意を表した。

そのほかに、通事（口語、通訳）の能力が原因で、交流が十分な成果が出せない場合がある。たとえば、「問答するたびに、通訳者は誤訳することが多い」、「通訳者は訳しはしたが、完璧ではなく明確ではなかった」、「通訳者は訳せなかった」といったことが頻発し、したがって、漢文体（中国文言文）を使用コミュニケーションの効果をあげるためには、「一つ一つの内容を書き留めて」、「紙に漢字を書いて」明示する必要があった。極端な場合には、同じ中国人どうしても、各地域の方言が異なるため、彼らは漢字による筆談でコミュニケーションを行う必要があった。たとえば、朱舜水（一六〇〇—一六八二）は「語言不明白、授紙筆令写（言語が明白でないの、紙筆を渡して書かせる）」と書いた。¹⁾

二、ベトナム筆談の分類

(一) 筆談の発生地

(1) 国内での筆談

国内での筆談とは、世界中の人々がベトナムでベトナム人または他国の人々で行った筆談を指す。

第一に、さまざまな理由でベトナムに来る多くの中国人がいる。ベトナムに派遣された中国使節団（陳孚、魯鐸、張弘至、徐孚遠、吳光、周燦、傅與礪、徐明善、張以甯、孫承恩、吳伯宗、湛若水、潘希曾、林唐臣、章敏、德保、顧汝修、李仙根）、ベトナムから招聘された人々（釈大汕 一六九五年）、ベトナムに亡命、漂流した中国人（朱舜水 一六五七年、蔡廷蘭 一八三五年）、及び貿易するためにベトナムに来た人々の筆談である。

第二に、『南漂安南記事』^{The South Drift in Annam}に記載されたベトナムに漂流した日本人との筆談。

第三に、『昼永編』^{The Long Day}鄭東愈著^{Jeong Dong-yu}に記載された一六八七年にベトナムに漂流した朝鮮人との筆談。その前、一五九七年に、趙環碧はベトナムに来て、ベトナムでの見聞を『趙環碧伝』^{The Legend of Chao Huanbi}にまとめた。彼はまた、文理侯鄭勳の宦官やそのほかのベトナムの知識人らと交流した。朱舜水の『安南供役紀事』^{The Annam Service Record}には、朱舜水と日本人の宋五郎という人との筆談がある。

さらに、筆者は、ベトナム人と少数民族の間の筆談も、漢字と中国文化の影響を受けたと推論している。関連する史料はまだ発見できないが、引き続き追跡したい。

(2) 外国での筆談

外国での筆談とは、外国でベトナム人が外国人と漢字を用いて行った筆談を指す。既存の文献では、中国と日本での筆談のみが確認できる。中国での筆談は主に二種類の筆談がある。一つ目は中国に派遣されたベトナムの外交使節によるもの、二つ目は二〇世紀初めに中国にいるベトナム人の「革命活動家」によるものである。日本での筆談は、主に日本において「東遊運動」を行うベトナム人によるもの。中国でも日本でも、筆談の参加者は中国人と日本人だけでなく、韓国人も西洋人もいる。また、歴史上、ベトナム人が朝鮮半島に行く記録があるから、朝鮮半島での筆談も出現する可能性がある。例えば、李楊煥(リ・ズオン・ホアン) (李楊焯(リ・ズオン・ホアン)の説もある)とその族人は一一五〇年に朝鮮半島に行き、旌善において李氏家族の集落を形成したという。李龍祥(リ・ロン・トゥオン)とその族人は一二二六年に朝鮮半島に行き、花山において李氏家族の集落を形成したという。そのほか、ベトナム人商団は六一二年に済州島に漂流した説等もあるが、残念ながら朝鮮半島での筆談を裏付ける史料はまだ見つからない。

さらに、インド洋海を航行する船で記録された筆談がある。それは、ベトナム人の禅師と中国人が、欧州から極東に到る英国客船(Kint Edward Steamer)の上で行った筆談である。

(二) 筆談の参加者

(1) 国籍からの分類(東洋、西洋各国)

ベトナム人の筆談の対象は、主に漢字文化圏の中国、朝鮮半島、日本の人々である。さらに、二〇世紀の終わりには、ベトナム人は欧米人でも筆談をした。そのほとんどがイギリス人であった。

(2) 業務からの分類

ベトナム人と外国人の間の交流の大部分は、主にベトナムと中国のさまざまな外交使節団または公的使節の行政外交に見出される。歴史的記録によると、ベトナム使節団は一〇〇回以上も中国に到達し(このうち、阮王朝(一八〇二—一九四五年)が三五回を占める)、中国の使節団は一七回(阮王朝では四回)ベトナムに到達した。したがって、これらの筆談文献は、すべて朝臣官吏間の公文書である。その中で、使節阮述は、多くの中国人及び日本人の官員と筆談を行った。唐道袁(招商局ベトナム支部の役人)、馬復賁(清朝使館員)、孔慶玉(天津管帯後営練軍の官員)、蔡簡涼(広東省候補知県)、また日本人の

曾根俊虎（海軍大尉）、イギリス人の麦士尼為能（Major William、清朝駐在の副将）、沈春輝（新安知県）、陳鈞平（候補知府）、張葆廉（使館差官）、唐景松（使部主事）、裴敏中（候補知縣、医者）などの名を挙げることができる。公式の筆談のほか、非公式の筆談が一つある。それはベトナムの大壮寺禪師と中国の張蔭環（欽命駐倫敦欽差大臣）によるものである。

中国では、ベトナム、朝鮮半島および日本の使節団とのやり取りは朝臣官吏間の公文書に属する。ベトナム使節団と朝鮮半島使節団との交流は、中国朝廷の「体例拘束」によって制限されており、「毎個人住其個人房、禁止他們來往交流。只有朝会之日、才相見幾次（誰もが自分の部屋に住んでおり、互いに交流することは禁じられている。朝会の時のみ、面会ができる）」と規定されたが、ベトナム人と朝鮮人の筆談による交流は継続されている。

たとえば、黎中興朝では（一五三三—一七八九年）、（越）馮克寛と（朝）李晔光・金華逸士、（越）阮公沆（ゲン・コン・ハン）と（朝）俞集一・李世瑾、（越）阮宗奎（ゲン・トン・クアイ）と（朝）李校理・莫自嘉・陳輝密、（越）黎貴悖と（朝）鄭春授（チン・チン、日本名—禾谷春洙）・洪啓禧（ヘン・キイ・ドシ）（ホン・ゲヒ）・趙榮進（ジョ・ヨンジン）・李徽中（イ・ヒウチュン）など。

西山朝では（一七七八—一八〇二年）、（越）阮提（ゲン・デー）と（朝）徐有防（セウ・ユファン）・李元亨、（越）潘輝益（ファン・

フイ・イツク）・段阮浚（ダン・ゲン・トゥアン）と（朝）黄秉礼・徐浩修・李百亨（イ・バクヒョン）等。

阮朝時代では（越）阮思憫と（朝）南廷順・趙秉高、（越）阮述と（朝）敏行山などが挙げられる。

ベトナム使節団と日本使節団との交流については、ベトナム使節の阮輝愷（ゲン・フイ・オアイン）が日本使節に贈った「餞日本使回程」の詩を参照されたい。この詩では、いくつかの日本語の韻は漢字を用いて記録されている。さらに、ベトナム使節の李文馥（リー・バン・フク）と琉球使節の間にも唱和の詩が残っている。

ベトナムでの筆談に直接参加した者は主に学者と知識人である。中国人では、前述の朱舜水是明王朝の征士（皇帝に仕えることを断って遁世隠居した学者）であり、清代の蔡廷蘭は澎湖諸島唯一の進士である。ほかに、『循環日報』の主筆である王操や梁啓超などがある。朝鮮半島の出身者では、趙素俄、徐興亜などがある。趙素俄と潘佩珠とは筆談を行ったことがあり、徐興亜と範鴻泰（ラム・ホン・タイ）もまた筆談を行った。なお、徐興亜というのは、某朝鮮人の仮名であり、彼は朝鮮半島独立のために世界各地を回って活動し、東京で範鴻泰と頻繁に会って国政を議論したという。

僧侶の筆談に関しては、ベトナム人は中国にいる多くの日本人沙門と筆談を行った。阮述の『往津日記』では「この三人は

剃髪して袈裟を身に着け、ベトナムの僧侶と同じような身なりをしている。彼らは参禅するために中国に来ているが、彼らはわが国の人も漢字を学んでいることを知って筆談をしに来た」と記している。特筆すべきは、釈大汕禪師（石濂）は、法会を営むためにベトナムに来るように阮朝国王（阮福澗、グエン・フク・チュウ）から頼まれた時のことである。禪師とベトナムの人々との間のコミュニケーションの手段は漢文による筆談であり、例えば、阮朝国王は禪師に向かい、「和尚の説教は通訳者が翻訳してくれたが、細かな点では不明瞭なところがあるので、これまでの内容を一つ一つ具体的に書き記してください。」と言っているのである。

(三) 筆談内容

(1) 外交と国政

阮述『往津日記』によれば、ベトナム使節団と天津の中国当局者との間では、口頭の会話による交流は筆談よりも少ないとのことである。使節団は連絡をとる必要がある問題はすべて、阮述と天津の馬大使（馬建忠）が筆談で意思疎通し、それを馬大使は李鴻章に提示して、李鴻章がそれを読んで馬大使に意見を伝え、馬大使は再び筆談で阮述に知らせる。阮述は馬大使、及び馬大使を含む清朝官員と、少なくとも二二回の面会と筆談を行っており、その主要な内容はすべて重要かつ「機密」レベ

ルであった。例えば、総理衙門からベトナム本国への外国との貿易条約締結の可否、李鴻章からの機密事項に関する詳細な質問、フランス総領事德里古によるベトナム事情の紹介、使節団の帰国に対する李鴻章（リー・ホン・チュウ）の許諾などである。

潘佩珠が筆談で日本に軍事援助を要請しようとする意思を表明した時、梁啓超は次のように述べた。「日本軍がいったん貴国に進入すると、その後彼らを追い出すことはできなくなるに違いない。それは国の回復を望んで、却ってますます国の独立を失う」。さらに、梁啓超は潘佩珠に次のようにアドバイスした。「貴国の独立の日が来ないことを心配する必要はない、国民が独立する資格を持たないことを心配すべきだ」、「貴国の強みは、民智、民気、そして人材にある」と。

また徐興亜（朝鮮人）と範鴻泰（ベトナム人）が東京にいたとき、「二人はしばしば国政について話し合った」、「それで徐興亜は視野がより広がった」という記録もある。

(2) 知識情報の共有

『問答』の詩の中で、李晔光（朝鮮人）は馮克寛にベトナムについて尋ねていた。

問…お国では、冬は春と同じくらい暖かく、氷はないですか？

答…南国です。春が長く、冬が短いです。

問…お国では毎年二回稲の収穫があり、一年間に八回も蚕が繭玉を作るといのは、本当ですか？

答…わが国では、一年に二回の稲作とトウモロコシがあり、八回繭玉を作る蚕と苧麻（カラムシ）があります。

問…お国の領土は？

答…わが国は五〇〇平方里（里は旧距離単位）です。

問…雲南省からお国までは何里ですか？

答…わが国と中国雲南省は国境を接していますが、山々に分断されています。⁽¹⁰⁾

馮克寛は、ベトナムの状況と文化をより具体的には、詩を作って李睟光に紹介した。

越甸居初定、天中正不偏。山林區虎豹、娛教樂魚鳶。閭巷開書塾、其亭賣酒船。

ほかに、「答朝鮮国使李睟光」という詩もある。

義安何地不安居、礼接誠交楽有余。彼此雖殊山海域、淵源同壹聖賢書。

交鄰便是信為本、進德深惟敬作輿。記取使輶回国日、東南

五色望雲車。

——『皇越詩選』卷五

李睟光にはベトナムについて前もって情報が入っていたので、筆談で次のように言っている。「交州は南の果てにあり、宝石、金玉、琳琅、玳瑁、象牙、犀角など、多くの珍しいものがあると聞いています。天地の優れた気が集まって育んだために、才能のある人がそこから生まれており、珍しいものがあるだけではないでしょう」(『芝峰先生集』卷八)。

胡季聲(ホー・クイ・リ)皇帝はかつて「答北人問安南風俗」という詩を作って、中国使節にベトナムの状況を返答している。

欲問安南事、安南風俗純。衣冠唐制度、礼樂漢君臣。

あるベトナムの役人は、国際的な習慣を従って、筆談で蔡廷蘭にベトナムの風俗習慣を紹介した。

わが国では、元日に鶏が鳴くころから、文官・武官の全官員が宮殿に入って皇帝を祝福し、皇帝が銭を分け与えてから退出する。その後、宮殿の門は封印され、皇帝が開門を命じるのを待って、宮殿内に入ります。もしあなたが皇帝を拜見したいと思うなら、宮殿の門が開くのを待って、宮

殿に連れて行ってあげます。もし皇帝がしばらく滞在しろと言われたなら、断らないほうがいい。もし予定があつて出発したときは、省官による通行の証明書があれば通してくれるはずで、特に問題はないです。正月七日に倉庫が開くのを待って、賞賜が交付されてから出発するといいでしよう。役所にお祝いの手紙を残しておけばいいでしょう。誰かがあなたの祝辞を官員に伝えてくれます⁽²⁴⁾。

また、ある南河（安南阮主が管理する地域）の該贖（官職名）は人を遣わして朱舜水を呼び寄せ、「征士」について尋ねた。朱舜水は次のように答えた。

崇禎十七年、被征不就。弘光元年復征、又不就。第三次竟除授江西等処提刑案察使司副使、兼兵部職方清吏司郎中、監荆国公方国安軍、復不拜。于是閣部、勳鎮、科道等官、交章論劾之瑜、偃蹇不奉朝命、無人臣礼。章甫上、瑜即星夜遁逃海滨、数月不見緹騎。（崇禎十七年に、仕官の誘いを辞しました。弘光元年に再び招聘が来ても、受けなかつたのです。三回目はとうとう江西等処提刑案察使司副使兼兵部職方清吏司郎中、監荆国公方国安軍という官職を授けられました。固辞しました。それで、閣部、勳鎮、科道の官吏らは交章して「偃蹇不奉朝命、無人臣礼（高ぶつて

命を従わず、人臣としての礼に欠ける）」と之瑜を弾劾しました。章甫の冠を呈上して、瑜は夜に海辺に逃げだし、数か月もの間追手の姿は見えませんでした⁽²⁵⁾。

天津に滞在したとき、阮述は地元の人々との筆談によって、見聞を広げた。天津使館の差官張宝廉と筆談を通して、阮述は保甲局という制度を知った。

中国には保甲局があり、十戸ごとに一牌を立てます。毎年、甲長（牌を調べる人）は某姓に男と女が何人いるか人口を調査し、年齢を問わず登録をしますが、どうしてもでたらめになつてしまいます⁽²⁶⁾。

使部主事唐景松との筆談で、阮述は中国のカトリック教会について理解した。

北京の武宣門には廟堂があり、門の上に大きな字で「勅建天主教堂」と刻まれています。聞くところによれば明朝に建てられたもので、その当時、利馬竇という宣教師が中国にやってきて、その人は暦算に長けていたので、中国でもその暦算が用いられています。暦算を講じるように命じられたので、この教会を立てるのを許されたのです。この西

からの宣教師は長くここにとどまって宣教しましたが、人はあまり信じなかつたで、この教会はとても冷たくて静かです。⁽²⁾

既述は武夷茶などの中国のお茶事情や人參についても、知府候補陳鈞平と知県候補裴敏との筆談で認知していた。

武夷茶とは福建省産で、また山で産します。生産される山の名を武夷と言いますが、実は栽培したものです。雑味がなく清らかな香りを有するものは浙江の本山茶が一番ですが、今は甚だ生産量が少ないです。浙江との境に南・北、二つの洞庭山（この二山は江蘇省に属します）があり、お茶を生産していて、味はとても良いです。関東に山があります。周囲、数千里にわたって、人が住んでおらず、人參を産します。毎年若干を献上して、余った人參はすべて商人の手に渡ります。ただし、その上質なものの多くは献上するのをひかえています。後年同様のものが再び手に入らないと、罰せられるのを恐れるからです。高麗人參は伊国（朝鮮）から、老山參は盛京から、土木參は吉林から産出します。⁽⁸⁾

(3) 日常の交際

個人の履歴や通信に関する筆談は以下のとおりである。

その大官は自ら紙に書いて、私の本籍や履歴、船の台風による被害状況などを尋ねた。私は、事の顛末を詳細に紙に書いた。大官は読み終わると、うなずいて、同情の意を表明した。⁽⁹⁾

朱舜水はその場にいる人に自分の履歴を書いて見せた。

朱之瑜、浙江餘姚人、南直松江籍。因中国折柱缺維、天傾日喪、不甘難發從虜、逃避貴邦、至今一十二年、棄捐墳墓妻子。虜氣未減、国族難歸。潰耄憂煩、作詩無取。所供是實。（朱之瑜。浙江餘姚の人です。本籍は南直松江にあります。中国は天柱が折れて地維が切れて大地が傾いたので、十二年目になります。郷里を離れて、妻子を捨てたのですが、蛮族はいまだ衰えず、王族たちは国に帰れません。年ばかり取って困っています。詩を作っても取れるものはありません。今申し上げたのは事実です。⁽³⁾）

人に旧友の近況を尋ねる記載は以下の通りである。

有名な法帖を、ある中国の役人がしげしげと見て、禪師と筆談を行った。

「字がとても良いです。内容も良い。どなたのですか？どなたの詩？ 誰の字？」

禪師は次のように書いて伝えた。

「ああ、それは阮晋景Nguyễn Tấn Cảnh（ケン・タン・カイン）という男のものです。挙人で、故吏部尚書阮思僩Nguyễn Sĩ Cảnh氏の四子です」。

「号は雲祿（バン・ロク）ですか。」

「そうです。」

「雲祿が北京に派遣された時に、すでに私は知り合いになり、雲祿は使節の時に私と唱和も行ったし、その当時の詩友でもあります」。

「貴方はどなたですか？」

「欽命駐倫敦欽差大臣張蔭環です。国の大事があつて皇帝に帰国を命じられたのです。現在、雲祿さんはどうしておられますか？ どこにいらつしやるのでしょうか？」

「雲祿先生は今、学問を教えてお金を稼いでいますが、非常に貧しく、家も土地もないので、友人の土地に身を寄せられているのです。」

「そうだったのですか。幸いにも禪師に出会えて、旧友の状況を知り、彼に手紙と詩を贈ることができます。お国に戻ったら、私に代わつて旧友にこう伝えて言つてくださ

い。「私はまだあなたのことを覚えています。当時、北京で会ったとき、私は機会があればベトナムに行くことを約束し、雲祿園を訪ねて酒を飲んで楽しい時間を過ごそうと言いました。それを果たせないまま、二〇年間が過ぎてしまいました」。

(4) 唱和の詩文

ベトナムと他の国々との筆談、特に公式の場での筆談の内容は、主に「対詩」、いわゆる唱和酬酢である。ふつう、漢字文化圏の各国はどれも詩歌の伝統を持っているので、彼らはしばしばこの種の文体を使って交流する。我々は、ベトナムと他の国との唱和を次のように分類することができる。すなわち、ベトナムと中国の唱和、ベトナムと朝鮮半島の唱和とベトナムと日本の唱和である。

(a) ベトナムと中国の唱和

莊秋君の記載によると、李文馥はかつて船上で広東省の文人が組織した会合に参加したという。この八月九日の会合は梁申が主催し、李文馥と他のベトナムの使節が招待された。

まず、船で花畑を見て回り、それから画舫に着いて陳昌運（字任齋）・趙拜農と一緒に陽が沈むまで飲んでた。宴会が終わりかけたところ、任齋は先に暇を告げ、李文馥は別れの詩（詩）

を次のように作った。

吟草遺編家有宝、甲花初度鬢如霜。江底漸見潮初落、園古
遥知菊自香。

陳榻款懸疑夢寐、李舟無侶惜匆忙。君婦請看樓頭月、辰伴
吟窓不斬光。

元朝使者と紅娘と「対詩」を行って、別れの贈り物とした。

黄裳は名残惜しげに次に次のように詠じた。

明日仙舟別洱河、今宵恩愛起詞多。來時説到相思事、望斷
衡陽可奈何。

紅娘がそれに詩を贈答した。

妾淚隨湘水、君情望嶺崖。北朝通孝久、使節又重來。

(b) ベトナムと朝鮮の唱和

朝鮮使節李輝中がベトナム使節団の黎貴惇に、次のように
語った。

遠方相見……、送給我們鮮美文章、一起見面、得到南方

金玉言辭、吟哦、帶回東土、在箱子珍藏。共同唱和、万
里不辭、詞短情長、精神通曉。(遠方から相見しましたが
……、私どもに鮮美な文章をお寄せくださり、こうしてお
目にかかつて、南方のすばらしい言辭を聞かせていただき
ました。ああ、東土に持ち帰って、大切に仕舞っておき
ます。ご一緒に唱和できるなら、万里も厭いません。詞
は短くても、心情は長く続き、気持ちは通い合っています。』
〔見聞小録〕^{〔見聞小録〕}

ベトナム使節と朝鮮使節との餞別詩としては、次のようなも
のが挙げられる。

「贈朝鮮国使李珣、鄭宇淳、尹坊回国」

公庭朝罷路分殊、遥指東瀛憶使乎。誌氣可能追縞帶、篇章
奚管付醬瓿。

敷文此日車同軌、秉礼從來国有儒。万里相逢知匪易、六年
王会一成圖。

(胡士棟^{HU SHI DONG} (ホー・シ・ドン))

「簡朝鮮国使俞集一、李世瑾」。

滄海揚塵幾度三、炎邦自昔宅郊南。六経以外無他道、一歲
之中熟八蚕。

万戸魚塩嘗給足、四時花草共敷覃。帰来宣室如前席、似與
 觀風助一談。
 (阮公沆)

朝鮮使節も餞別の韻詩が残っている。

(附録) 朝鮮国副使吏曹判書内閣学士徐有防和体。

莊莊俯仰大輿堪、日出箕東水尽南。逸矣封疆迷極望、忽同

口序喜相參。

降衷自古人兼我、贈別如今悵更慚。莫惜方音難解意、憑將

文字替酬談。

(徐有防)

(C) ベトナムと日本の唱和

一七六〇年、黎貴惇は滞在中、二人の琉球「留学生」との出
 会いを記録したが、唱和の詩が記されていない。阮青松(二〇
 〇七年)によると、阮輝儼(Nguyễn Huy Oánh)は日本使節の帰国
 に詩を贈ったという。

朽岡虚路各天涯、多俟欣逢大米家。日送浮泥寧活計、手樹

鮮素共金羅。

傑奴羊壳西孫歩、采落明東阿将梭。華蓋力哥非敢擬、漫將

粉地寓情多。

李文馥と琉球使節との詩句もある。

千里文章同一脈、為憐筆墨遜三分。茫茫旅地誰知己、半卷
 全詩語寂熏。

三、筆談資料の価値

(一) 歴史資料としての価値

ベトナムと他国との筆談は、ベトナムの歴史、とりわけ公式
 の史書に完全には記録されていない国際関係の一部を補完する。
 たとえば、範慎適が正使、阮述が副使を務めた阮朝使節団は、
 清朝政府に対してフランスとベトナムとの戦争に干渉すべき
 だと提案したが、清朝政府はベトナムを援助しなかった。正史
 『大南実録』では仏・越間のフエ条約による新しい条項によっ
 て、清朝はベトナムに干渉できないことを理由に、ベトナムに
 対して責任を放棄したと書かれている。阮翻が広東省に駐在し
 たときに、阮翻は再三広東総督に謁見しようとしたが、広東総
 督はフランス側の怒りを恐れて、それを口実に応じなかった
 のである(『大南実録』)。一方、阮述の『往津日記』には、ベ
 トナム使節と清朝政府代表者の間で少なくとも二五回の筆談
 が記録されており、この中には明らかに当時の清朝の消極的
 な態度が反映している。阮述と馬大使(馬建忠へ一八四五—
 一九〇〇)と何度も筆談で意見を交わし、それを李鴻章に上
 程している。その後、李鴻章の指導意見を伝達するために、阮

述と馬大使はまた複数の筆談を行っている。

『海外紀事』『安南供役紀事』『海南雜著』『昼永編』などの書籍は、ベトナムの国家状況、社会、文化などに関する多くの歴史的資料を提供している。さらに、このなかの筆談は、多くの貴重な歴史資料的価値をも有している。たとえば、ベトナムの漁師も漢字が理解していて、蔡廷蘭が自分がどこに漂流したのを知らせるため、漁師が「安南」という二字を書いて見せたのである。ベトナムと朝鮮に関する研究者は、ベトナム社会における女性の地位に非常に驚いている。さらに驚くことには、女性も漢字も理解でき、ベトナムに逃げた朝鮮人を許す力を持っていたということである。

『昼永編』にこういう記載がある。「(朝鮮人は) 黒い服を着て、馬のしっぽのような帽子をかぶった役人のところに送られた。その役人は椅子に座って問答を書き記した。我が国の王子は以前貴国の人に殺されていたので、今、私たちはその復讐のためにお前たちを殺す」と。濟州島の人々はその漢字を見て、みな泣きだした。そこへ突然、絹の着物を着て装飾品を沢山身に着けた人が現れた。それは貴族の女性で、珍しい香りを漂わせていた。筆を手にとってこう書いて見せた。「あなたがた泣くことはありません。私たちは人を殺しませんから。あなたがたはここにとどまってもいいし、ここを去ってもいいのです。」と。この筆談記事は同時に、安南の王子が一六八七年に

朝鮮人によって殺されたことを示す史料でもある。各種の公的歴史には、この内容は記されておらず、ただ一六一二年に朝鮮半島の人がベトナム商人を殺害し、強奪した事件についてのみ言及している。

ベトナムと外国との筆談は、ベトナムに重要な歴史資料を提供するだけでなく、関係諸国にも歴史資料を提供する。筆談によつて、当時、外国人がベトナムの自然環境や人文社会について理解を深め、またベトナムについての見解を表明することもあった。たとえば、李晔光はベトナムのことをある程度理解しており、蔡廷蘭はベトナムの習慣についてより詳しく知つて現地の風俗習慣に適應することができた。ベトナム筆談資料はまた、日本人がしばしば公務のために上海に来たとか、三人の日本人僧侶が参禅するために中国に来たとか、ある英国人が三三年間中国に滞在し中国で役人を務めていたといった様々な情報を我々に伝える。唱和詩の詩句を通して、我々はその官員たちの身分を性格を明確に理解することができるが、これらの情報は公式の史書では言及されていない。たとえば、広東省人の梁申は史書には記録されていない人物であるが、李文馥と汝伯士に贈られた詩から、彼が海南島の人であることがわかる。李文馥は梁申のことを、「学才有本領、詩好若工巧(学才に本領あり、詩良く工巧の如き)」と褒めている。この記録は、広東省の地方誌や中国人物志に必要な史料を提供する。

さらに、ベトナムや他国の筆談によれば、遭難したほとんどの外国船が広南峴港海岸に漂流していることがわかる。阮朝は遭難者（中国人）を帰国させる船を護送して、多くは広南峴港から出発している。これらの筆談は、広南峴港（古くから有名な港町会安）の地方誌に多くの貴重な歴史資料を提供する。

(二) 文学価値

第一にこれらの筆談は、豊かな文学の内容、体裁、芸術形式を有しており、ベトナムにおける外交文学と使節詩文において大きく貢献する。外交文学と使節詩文は、ベトナム文学の歴史において非常に重要な位置を占めている。『出使詩』では、「使節の詩の中で最も感動的なものは、愛国心と民族の誇りを賞賛する詩である。開国以来、その愛国心はわが民族の誇りであり、戦時の武器であり、そして倫理道徳である。」と述べられている。

それらの創造、唱和酬酢は、その場における各国使節間の直接的な外交関係や感情交流を示すだけでなく、ベトナムの詩文の世界を豊かにするものである。特に、そのような唱和と応酬のやり取りは、本場中国の文人や学者から、ベトナム使節の文学的造詣が刮目すべきものであり、「典故の使用や表現の熟練」「韻への習熟」などにより称賛を博していた

ベトナム人と外国人との筆談は、ベトナムの漢詩・漢文作品

を充実させるだけでなく、ベトナムの漢文学にとって不可分な一部分にもなっている。これらの資料は、将来の世代に国際的なベトナムの文学者、それぞれの時代の文学思潮および文学の背景を研究するために、豊富な情報を提供する。

(三) 思想・学術的価値

筆談の参加者のほとんどは知識人であり、そのために彼らは学術的および思想的コミュニケーションが必要であった。蔡廷蘭が皇帝から「文学出身の人」と呼ばれているのを知ったとき、役人は暇なときにしばしば彼を呼んで「筆談」を行ったという。

朱舜水はかつてある官職の低い役人に「易学義理」を教えた。「河図洛書、各方位、各地方、先天後天、都有清楚地記載、不餘不少（河図洛書は各方位、各地方、先天八卦、後天八卦について、正確に記載されており、余すところがなくて欠けているところもない。）」、「上下四邊、左右先後、多少配合、都有九數、四九六六、花柳満成（上下四辺、左右前後、バランスよく配置された。すべて、九数図が当てられて、四、九、六、六とうまく配当している）」。

ある時、朱舜水はもう一人の役人と筆談をしたが、その役人は古文の義理に尋ね、「植橘柚於玄朔、蒂華藕於修陵（橘柚を玄朔に植へ、華藕を修陵に蒂（つ）く）」の二句の義を問うた。

朱舜水は「橘植於南方、其性畏寒、過淮則化而為枳。華藕者美

菓也、即今之荷花。若栽於高岡之上、豈能榮茂。二語総言托非其所。(橘は南で植えており、寒さに弱いものです。淮河を過ぎると積となります。華藕は芙蓉です。今は蓮といっています。もし高い丘の上で栽培したら生い茂ることはないでしょう。この二つは全て託さざるところに託してしまうことをいうのです。)と書いてみせた。役人はまた「折若木而閉蒙汜(若木を折りて、而して蒙汜を閉さん)」、「鳶飛戾天(鳶は飛んで天に戻(いた)る)」を尋ねた。朱舜水がそれを注意深く説明したところ、役人は喜んで「ベトナムでの解釈は素朴なものです。」と言ったが、朱は「解釈は素朴でもいいですが、全く間違えていないかが心配です」と答えた。

朱舜水と地元の人々との筆談には、次の記録がある。

黎雲「このかたは極めて学が好きで、お宅にはたくさん
の書物があります。」

朱「古い書物は多くありますか?」

黎雲「見るのに十分なほどです」。

朱「通鑑綱目、前後漢書、廿一史、史記、文獻通考、紀
事本末、潜確居類書、焚書、藏書と古文奇賞、鴻藻は
ありますか。」

黎雲「すべて持っています、鴻藻だけはありません。」
朱「安南には書物はなく、私は祖国を離れてから十三年

になります、書物などは見当たらず、学問が極めて疎かになりました。それはとてもありがたい、恐れ入りますが、二部を借りて寂しさを紛らわします。」

上記の筆談は、当時、広南峴港(会安)の民家に多くの書物があり、この地で書物が広く読まれていたことを証明している。それと同時に、この地の漁師が、一六八七年に漂流した朝鮮人と、漢字で筆談できることも間接的に証明している。

筆談を通じて、ベトナム使節や知識人は、近隣諸国や世界の状況を深く認識しており、さまざまな科学のおよび社会的側面をよく理解している。新しい知識を求めるために、イギリスの副将麦士維能が一八日に阮述を訪れた後、阮は二〇日にまた麦士維能を呼んで、通商について筆談で話し合うことを望んだという。

四、結論

筆談は、ベトナム人と東アジア諸国の人々、および漢字を知っている西洋人との間のコミュニケーションの方法となっていた。これは、「共欲酣杯終日語、卻愁南北不同音(共に酣杯し、終日語らんと欲すれども、却って愁ふ、南北同音ならざるを。)(越南陳朝阮忠彦使臣)」という言語制限を克服し、「問

答須憑筆、言談在此書（回答、筆に憑ると須つも、言談この書に在り。）（『得泰船筆語』）、および「舌従筆吐情如画（舌、筆に従りて情を吐くこと画の如し）」（越南阮朝使臣李文馥）というような、良好なコミュニケーションを取ることができていた。ベトナム人は世界中の人々と筆談を行っており、その参加者は多様な身分（役人、学者、僧侶、商人）にわたり、筆談内容も極めて豊富（政治交流、国政、情報交換、社会交際、唱和文章）であった。筆談は歴史的、文学的、思想的価値を有しており、ベトナムの重要な文献と文化遺産となっている。

（本稿は二〇一七年中国国家社科基金重大项目「ベトナム漢字資源整理及周辺の研究」(17ZDA308) に基づく研究成果である。）

〔注〕

- (1) 永聘『ベトナムと日本の文化交流』、ホーチミン文芸出版社、二〇〇一年版、一二七頁。
- (2) 永聘前掲書、一二六頁。
- (3) 阮伯成主編『越南韓国文化相同』、五一頁。
- (4) 永聘前掲書、二二〇―二二二頁。
- (5) 永聘前掲書、六五頁。
- (6) (清) 積大汕『海外紀事』、ダナン大学師範大学出版社、二〇一六年版、四一頁。
- (7) 積大汕前掲書、五一頁。

- (8) 陳益源・吳德寿（訳）、蔡廷蘭と『海南雜著』、ハノイ労働出版社、二〇〇九年版、一七七頁。
- (9) 積大汕前掲書、五一頁。
- (10) 陳益源前掲書、一七七頁。
- (11) 朱舜水「安南供役紀事」、『朱舜水集（卷二）』、中華書局出版社、二〇〇八年版、二〇頁。
- (12) 閉朗玩『越華通使史略』、一九四三年版、一三一頁。
- (13) 求封―一八〇二年、一八二〇年、一八四一年、一八四八年。朝貢―一八〇四年、一八〇九年、一八二三年、一八三六年、一八二四年、一八二八年、一八三二年、一八三六年、一八四九年、一八五三年、一八五七年、一八六〇年、一八六八年、一八七二年、一八七六年、一八八〇年。礼聘―一八〇四年、一八〇九年、一八一九年、一八二〇年、一八二四年、一八三〇年、一八四一年、一八四五年、一八四八年、一八五一年、一八六五年、一八六七年、一八七〇年、一八七六年、一八八三年。
- (14) 冊封―一八〇四年、一八二一年、一八四二年、一八四九年。
- (15) 阮伯成前掲書、五七頁。ベトナム使節使臣黎貴惇による。
- (16) 阮伯成前掲書、五七頁。朝鮮半島使臣李暉光による。
- (17) 阮伯成前掲書、四七頁。
- (18) 永聘前掲書、二四七―二五五頁。
- (19) 阮述著、陳荆和編注『往津日記』、香港中文大学出版社、一九八〇年版、六八〇頁。
- (20) 積大汕前掲書、五一頁。
- (21) 永聘前掲書、一四〇頁。
- (22) 永聘前掲書、二五三―二五四頁。
- (23) 阮伯成前掲書、五八頁。

- (24) 陳益源前掲書、一九二―一九三頁。
(25) 朱舜水前掲書、二〇頁。
(26) 阮述前掲書、七八頁。
(27) 阮述前掲書、八〇―八一頁。
(28) 阮述前掲書、八一頁。
(29) 陳益源前掲書、一七七―一七八頁。
(30) 朱舜水前掲書、一五頁。
(31) 閉朗玩前掲書、一三一―一三二頁。
(32) 庄秋君「海外に知己存す―一八八三年ベトナム使臣の広東省旅行記」、『ベトナム学研究与教学論文集』、ホーチミン国家大学出版社、二〇一七年版、八三―八三五頁。
(33) 阮伯成前掲書、五九頁。
(34) 阮青松「外交官阮輝儻」、『阮輝儻研究論文集』、ハノイ社会科学出版社、二〇〇七年版、一八六頁。
(35) 阮青松前掲書、一九〇頁。阮輝儻は詩の創作にあたり、明清時代漢字音で表す日本語彙を使っているとの指摘がある。例えば、「浮泥〓船」、「傑奴〓昨日」、「華蓋〓若者」。
(36) 『朝鮮王朝実録・光海君日記（卷十五）』参照。
(37) 莊秋君前掲書、八三四頁。
(38) 漢喃研究院『出使詩』、ハノイ社会科学出版社、一九九三年版、二〇頁。
(39) 永聘前掲書、三七三―三七四頁。
(40) 朱舜水前掲書、二七頁。
(41) 朱舜水前掲書、二七頁。

